研究分野	資源生態	部名	漁場環境部
研究課題名	いか類漁場調査		
予算区分	県単		
試験研究実施年度・研究期間	昭和５２年度～平成１８年度		
担当	清藤真樹		
協力・分担関係	（独）日本海区水産研究所、北海道区水産研究所		

＜目的＞

スルメイカの漁獲変動に及ぼす各要因の関係を明らかにし、予測に必要なデータは何かを精査する。

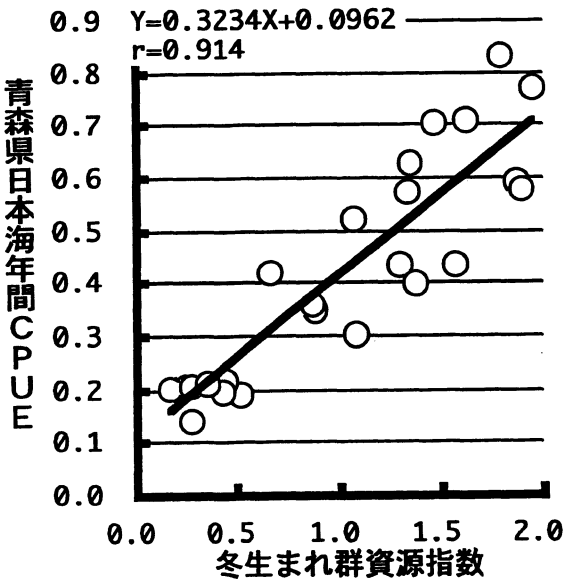
＜試験研究方法＞

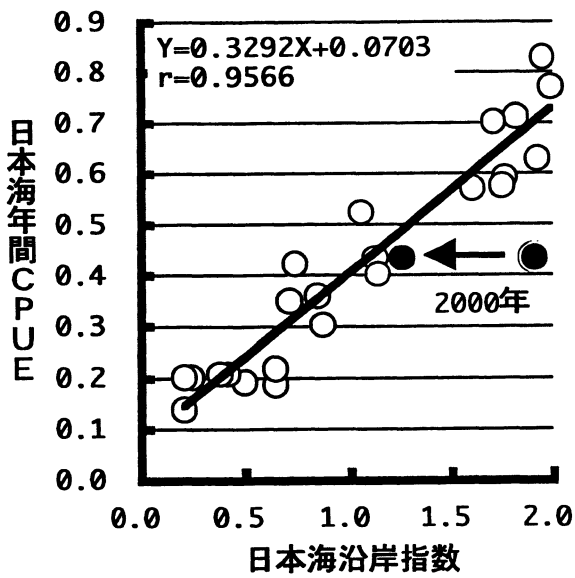
（１）期間は１９７９年から２００３年。５月から１２月を各漁期とした。
（２）北水研及び日水研で算出している秋生まれ群、冬生まれ群の各資源量
（３）青森県主要港のスルメイカ生鮮水揚データ
（４）試験船による海洋観測データ

＜結果の概要・要約＞

（１）日本海海域

本県日本海海域におけるスルメイカの漁場形成に最も影響を与える要因は冬生まれ群資源の豊度であり、それに加えて北上期の秋生まれ群資源がどれだけ沖合から沿岸に回遊するかにより決定される。ただし、北上期間中、沿岸域の水温が早く上昇する場合などは秋生まれ群の加入が少ないか、ほとんどなくなり２０００年のような状況となる。その海況状況は観測による断面積算水温により把握できる。（※１：冬生まれ群資源指数とは１９７９年からの資源量の平均比、※２：日本海沿岸資源指数とは冬生まれ群資源指数に秋生まれ群資源の豊度に応じた加入量を加味した数値）

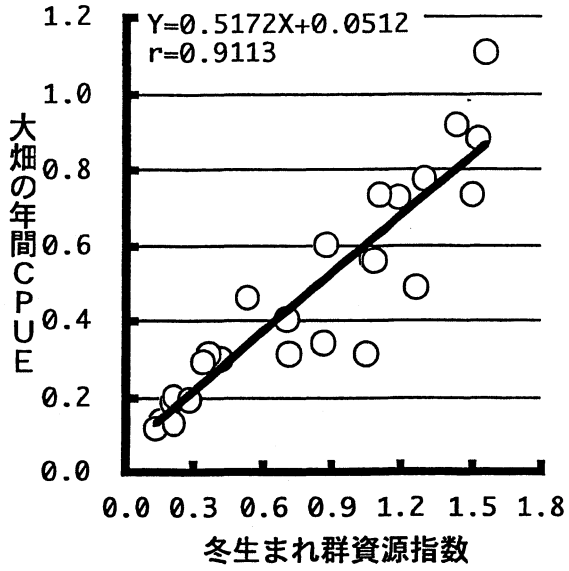


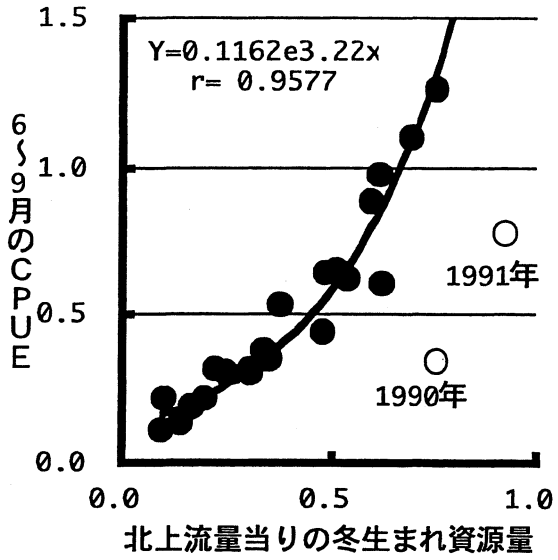


（２）津軽海峡海域（大畑）

青森県津軽海峡において漁場密度（ＣＰＵＥ）は、冬生まれ群との相関が高く、冬生まれ群資源の豊度に依存しているといえる。しかし、青森県日本海における冬生まれ群資源指数と年間ＣＰＵＥとの相関係数（ｒ）よりも低い値となっているので、更に別の要素が介在しているものと考えられる。一例として年間の約７５％の水揚がある北上期の６月から９月において、

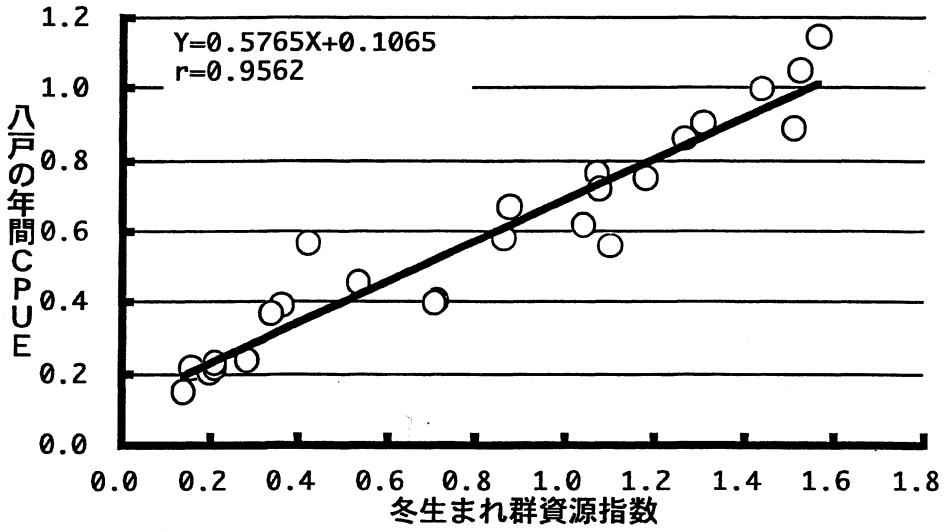
日本海沿岸の北上流量当たりの冬生まれ群資源量に関係が見られ、量と流れという物理的な要因がある可能性が考えられた。





（3）太平洋海域（八戸）

太平洋海域においては、冬生まれ群資源との関係が非常に高く、その豊度が漁場形成、密度に非常に大きな影響を与えていると考えられた。



（4）まとめ

以上をまとめると、年度ベースで青森県沿岸のスルメイカ生鮮漁獲量の変動を考える際、その前段となる漁場形成要因として最も重要なのは、冬生まれ群資源の豊度であることが分った。

＜今後の問題点＞

年度ベースの主要因が分ったことは、今後短期的な漁況を考察する基礎となるはずである。昨年の報告書で日本海海域の漁獲と海況について考察しているが、更にいろいろな要素を含めて、各海域の解析を進め実際の漁業に役立てて行く必要がある。

＜結果の発表・活用状況等＞

平成１６年度試験研究機関成果報告会

平成１６年度イカ釣漁場開発調査資料第３０号